

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2001年5月 NO.101



「盾に昇る」 大野匠

〈もくじ〉

自然のすばらしさ、ありがたさ……………	森山泰宏	2
ふる里回顧記……………	吉本卓郎	3
第11回高知出版学術賞の審査を担当して……………	中内光昭	4～5
山に学ぶ、木に学ぶ②……………	福留将史	6～7
万葉文芸学(二)……………	浜田清次	8～9
白やぎさん……………	山田まさ子	10～11
桜の散るころ……………	田代夕子	12
土佐人と名前の功罪……………	雪本信彰	13
風俗歳時記・風伯……………		14～15

(財) 高知市文化振興事業団

自然のすばらしさ、 ありがたさ

森山泰宏

近年、子どもたちを取り巻く環境が大きく変化し、不登校、いじめ、深刻化する少年犯罪等、その状況は大変厳しいものとなっています。子どもの問題は大人社会の反映ともいわれますが、背景には、さまざまな体験活動の不足があると指摘されています。

来年四月から学校も完全週五日制となり、子どもたちは土・日を利用して、地域において生活体験や自然体験、文化・スポーツ活動ができるようになります。

学校では、週五日制に合わせて、教科内容が精選され、知識の暗記や詰め込み式の授業から、「ゆとり」の中で、基礎・基本を確実に身につけることに重点が置かれます。

それによって、授業の分からない子どもや学校嫌いの子どもを無くし、学校が楽しく生き生きとした場となる。

ことをめざしていきます。

これからの学校教育では、知識を覚えるのではなく、自ら学ぶ意欲をもって、自ら考え判断する力、自分の思いを表現する力、課題を発見し解決する能力などを育成することに重点が置かれます。

小学校三年生以上には、各学校が工夫し、特色のある授業を実施するための「総合的な学習の時間」が新設され、この時間には、校外に出て自然体験や社会体験をすることもできるようにします。

私が子どものころは、遊びや家事の手伝いで体験を積んだものでした。学校から帰って、玄関にカバンを置くやいなや家を飛び出し、近くの原っぱに全員集合。

そこには、上級生も下級生もいて、

いつも異年齢集団で缶ケリやかくれんぼうなどをした。

肥後守で竹ヒゴを削り、凧をついたり、こま回しなど技術を要することは、先輩の指導よろしきを得た。けんかもあったが、たいがい上級生が仲裁したり、度が過ぎれば、それとなく大人が出てきてしかられたり。夕方には風呂当番。田舎だったので、我が家に水道は無く、手押しポンプを押してバケツに水をため、一ぱいずつ運んで桶を満たした。

ガスも無いため、戸外の焚き口に回って、火をおこさなくてはならない。山から拾ってきた杉の枯れ枝の上にまきを置き、マッチの火を近づけると、パチパチと乾いた音を立て勢い良く燃え上がる。

自然体験といえ、見渡す限り田んぼ一面レンゲの緑のジュータン。花が咲けば、鮮やかなピンクのジュータンに変身。日の丸弁当をつくってもらって、その中で友だちと食べた思い出のなつかしい味。

菜の花の季節には、匂うばかりの黄色の花園。そこに舞うモンシロチョウやモンキチョウ。

盛夏に出現するシオカラトンボ、ムギワラトンボ、ヤンマ類、初秋のアカトンボ、キトンボ。

実った稲の間から群れになって飛

び出したイナゴ。

小川には、メダカ、コイ、ミズスマシ、ゲンゴロウ、タイコウチ。季節ごとにくらうらう自然の中で、虫採り、魚取りにと駆け巡った山野のすばらしさ、ありがたさ。

二十一世紀にはばたく子どもたちには、自然との豊かなふれあいを通して、かけがえのないたくさんの思い出を作ってほしいと願っています。そのためにも、自然に恵まれた里山は可能な限り残していくべきであると考えますし、子どもたちのしなやかな感性や豊かな情操を育む舞台として、子ども科学館や野外活動センターの建設に意欲的に取り組んでいきたいと考えています。

(もりやますひろ／高知市教育長)



ふる里回顧記

吉本卓郎

ペギー葉山の歌ではないが、「南国土佐を後にして」郷土の山河幾星霜、「光陰矢のごとく」歳月の経つのは早いもので、思い出深いふるさと高知を出て半世紀が過ぎ、さらに月日を重ねている。

ふるさととは、緑の木々と青い空と海、自然がいっぱいの南国土佐です。「四国八十八カ所霊場遍路」という言葉を聞くと私の心に郷愁のよなものが感じられ、今でも私の脳

裏にやきついて少年時代によく見かけた白装束の遍路姿がよみがえる。

子どもの頃はかなりの腕白で、ふるさとでの青年時代も不良ムスコのレッテルを貼られていた。終戦後、私は青年時代の汚名の返上を期し、家出同然のようにして高知を離れ、福岡に暮らすこととなった。挫折の連続だった人生ともいえるが、結局は挫折を貴重な経験としてうまく折り合いをつけ、今日がある。

激動の大正・昭和・平成と、多彩な人生八十有余年を、克服と努力を重ねながら常に挑戦しつづけてきた。しかしながら、振り返ってみると短い感があるものである。

よく町で「私は土佐出身だ」と言くと、「あ、いごっそうですか」という言葉が返ってくる。「いごっそう」という土佐人へのレッテルは、

頑固で融通がきかない田舎者という評価と、正しいと思う主張を曲げないという評価がまじりあって強い関心をもたれる。郷土土佐では、昔から実によき言葉で、男の代名詞として使われている。

「いごっそう」とは、高知では人物を評価するときに使う言葉であると私は思っている。これは自分の主張がはっきりしており、損得にかかわらず人と安易に妥協しない気質を表す言葉である。その一方、悪く解釈すると、頑固一徹の考えをもち人の話などまったく聞かない「天邪鬼」「アマノジャク」のような人で、人が東なら俺は西だというようなへそまがりやを指している場合もあるようだ。私としては、土佐の「いごっそう」精神は、独特の野性的な風土や慣習の中で健全な文化の創造を促すものであると思いたい。こう考えると、明治維新の立役者坂本龍馬が浮かんで、まさに「正義感」が生まれ

てくる。私は、土佐人が常に歴史の進歩を望み、真実と正義を大切にしている「いごっそう」であることを信じます。私たち郷土を離れた者たちは、県人会を組織し、年二、三回の会合を行うことに誇りをもっていきます。ふるさとを大事に思い交流を重ねている

その場所、必ずよきこい節を歌い、郷土の誇りでもある土佐弁で箸拳に興ずる、これを心の支えにふるさとを生涯忘れず大切に、人生を生き抜いておられます。

これから県外へと飛びたっていく若者には、いつまでも郷土を愛し、ふるさとを守ってほしいものです。高知県人は正直者であるが自我が強いので誤解されることも多いでしょう。この点についても、留意する必要があります。

「いごっそう」に代表される高知県人の意地っ張りな気質と、その荒々しくも心温かい県民性を育てた歴史と風土を見つめ直し、今後の人生行路の得難い指針となるものと確信しております。

土佐の独特の野性的な風土や慣習の中に健全な文化の創造を目指していきたいと願っております。

よしもとたくろう／西日本高知県人会会長・北九州管財株式会社社長・春野町出身



第十一回高知出版学術賞の

審査を担当して

中内光昭

土佐藩戊辰戦争資料研究会（代表 林英夫）編
「土佐藩戊辰戦争資料集成」

高知市民図書館刊

「高知出版学術賞」の対象は「高知県内に在住する者の学術的著述、または他県在住者で高知県に関する事項をテーマにした学術的著述であること。学術的な著述であればジャンルを問わない。啓蒙書、入門書、概説書はもちろん、記録、調査等も含む。」とされている。広いジャンルで、専門書から啓蒙書までという作品の中から三点を選び出すための万人が納得する基準は、残念ながら無い。広義のオリジナリティーは必須の条件ではあるが、それは適否の基準にしか使えない。絵画と彫刻の美しさを比較したり、鯨とステークの旨さを論じるに似ている。

本年度の推薦作品は二十点（重複推薦を除く）、伝記四、歴史三、言語、社会、教育、農学、各二など多分野にわたっていた。うち、専門書は七点、啓蒙書が十三点あった。二回の審査会を経て最終的に選ばれたのが次の三点である。

本書が作られた経緯は小ささか異色である。もともと林英夫氏（立教大学名誉教授）のもとで、古文書の解読の勉強をしていた市民グループが、本資料に注目し、膨大な資料（市民図書館等に所蔵されている）を読み解き、五名の専門家の解説を付して刊行したものである。

一八六八（慶応四）年正月、城下を勇んで出発したものの、土地不案内な、鳥羽、伏見、宇都宮、白河、会津などでのなまなましい戦いの様子が、兵士たちの日記や手紙、従軍者名簿、墳墓の記録などにより、リアルに再現されている。淡々とした

記録が内戦の意味を読者に問いかけていて、単なる「官軍」の戦記を超えている。

膨大な記録を網羅主義で徹底的に収集、解読、記録、整理して、今後の研究に不可欠な一冊とし、さらに網羅主義に伴う不便を補って余りある親切な索引（日時、場所、人名、事項いずれでも引ける）が付されていることも高く評価された。

本書にも述べられているが、「官軍」だけでなく、「賊軍」の悲惨な記録についても本書のような作業が待たれるところである。

加藤秀弘 編著
「ニタリクジラの自然誌

平凡社刊

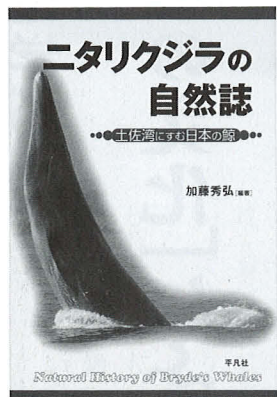
水産庁遠洋水産研究所鯨類生態研究室で室長を務める編著者が主要部分を執筆し、土佐湾で行われた調査については、同研究所や高知県の研究者が記載している。

いわば「クジラ学」のコンパクトな入門書であり、高知のホエール・ウォッチングのガイドブックでもある。

リクジラを中心に、クジラ類の定義、名前の由来、分類、形態、生態などを概説し、土佐湾で行われた大がかりな調査の結果をまとめてある。本書は一般に馴染みがありながら、まとまった解説書の少ないクジラ類を分かりやすく解説した啓蒙書としての価値が第一に評価された。さらに、特定の水域での特定の種の生態を科学的に調査、検討した学術的価値、地域の観光産業として注目されているホエール・ウォッチングの科学的なガイドブックとしての価値も評価された。



土佐藩戊辰戦争資料集成



ニタリクジラの自然誌
—土佐湾にすむ日本の鯨—

浜田清次 著
「万葉集を読む」(上・下巻)

浜田清次刊

高知新聞文化教室および浜田万葉記の会での著者（高知工専名誉教授）の連続講義の録音テープをもとに、補筆されたもので、受講生の笑い声まで忠実に再現されている。

文字通り、万葉の秀歌を受講生とともに（声を出して）読み、解釈し、鑑賞するという、本来単調な講義のはずなのに、受講生の数は回を追うごとに増えたという。この受講生

による授業評価は一読して理解できず、決して息の詰まるような講義ではなく、講師の蘊蓄を背景に、話はあつらふ時は現代に、ある時は高知に飛び、融通無礙に展開される。

最近教師の授業の仕方がまずいとかで、もっと授業テクニクを習得させよという声があるらしい。本当にテクニクが問題なのだろうか？生徒を引きつけるのは教師の奥深い学識であり人間性ではなからうか？教師が一つのことを研究しその自信を背景に生徒に向かうことの大切さを本書は教えている。

本書は、とりわけ、その啓蒙書としての価値が評価された。



万葉集を読む（上・下巻）

審査は今井嘉彦、内川清輔、瀬戸勝男、田村安興、西島芳子、吉竹博の各氏と筆者で行われた。

（なかうちみつあき／高知大学元学長）

山に学ぶ、木に学ぶ ②

身近な「木の文化」にふれて



福留将史

「文化高知」の記念すべき百号に連載させていただき、その後いろいろな方からご意見を頂きました。こんな仕事をしていると、なぜかひよんなことから木のことについて話してくれないか？と依頼があります。例えば小学生から、ご年配の集まりまで。

そんな時は、スギの木を例にとりて開口一番、「この木は人間の体温が一番近い木だ」なんていいます。すると、ほぼ百パーセントの人が驚いて話にひきこまれ、ついつい長話になってしまいます。この間も、ラジオ局のリポーター四人が森林センタリーに来ていて、生放送のおわった後同じような話をしました。そのような話に少し触れながら「木の文化」

について考えてみたいと思います。よく、どうしてこの仕事に入ったのか？木のいいところは？と聞かれることがあります。そういう時は「目をつぶっていてもわかる木があるよ、それはなんだ？」とかいって煙に巻いていきます。

杉の木を例にとると、まっすぐ伸びる木、という性質から名前の由来や感覚を教えてくださいます。五感で覚えるのです。日本人は知らず知らずのうちにインプットされた木の感覚を持っているのです。日本人は多くの木材資源に恵まれてきたため、例えば、道具ひとつを例にとってもわかるように、木から板を取るときでさえ昔は割って板を作っていた。割木工というもので、木にとってとは

てもいい使い方方で、素直に繊維方向に斧で割ることができる木の使い方は、日本人独特の技術がそこにあったと考えています。

木の使い方はその伐採された土地の気候風土にあった場所です。ベストといわれます。また、木の立っていた方位のまま使うのはプロにとってはあたりまえのことなのです。例をあげると、飛鳥時代に法隆寺というお寺が建てられました。このお寺は、仏教という宗教を日本に広めるための目的があったといわれています。飛鳥人がその考えられる知恵を最大限生かしてお釈迦様のため一生懸命作った建物。だから、世界遺産として最古の木造建築として今日まで建物が残っている。

つまり、斧にはお酒とうまいもの

がついている。となるわけですが、これにも日本独特の慣わしがあって山でキコリが木を切るときは、木にお礼をいうのですね。「今から切らせてもらいます」「大事に使わせてもらいます」とか言って。ですから斧に刻まれた線の意味はそういう木に対する感謝の気持ちを含めたものです。実際、昔、木を切るときは、斧で木を切る前に木に斧をもたせかけておいてお礼をいってから切りました。山奥にお酒とお供え物をもっていったら荷物になるので、たいへんなことになりま

人の木に対する感謝の気持ちを表したものであると思います。

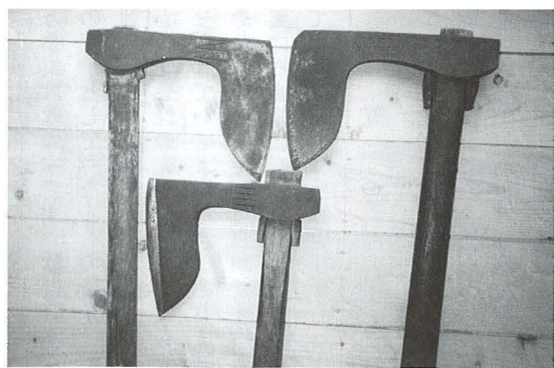
それに関連してこんな言葉を思い出します。アメリカのインダストリアル・デザイナーのレイモンド・ロウイが「卵と縫い針のデザインは百万ドルもらってもお断りだ」というのです。長い年月をかけてできたものは、それ自身が完成された形であり、そうそう変えられるものではないという意味なのでしょう。この言葉から、わかるように長い年月をかけて作られたものは、その形を変えることはできない、ということ

今、千年以上培われてきた日本の木の文化が形となった「道具」が失われようとしています。もうなくなつたといつても過言ではないのかもしれない。しかし今ならまだ、その道具を使うことはなくても展示という形で保存し、後世に語り継いでいく、そんなことができな

現代の人もそうでしょう。誰かを好きになつた、あるいは誰かに世話になつてその人のため何かしらしてあげようと考えたとき、そこに損得勘定とか、期限なんて考えないで私たちはベストを尽くすでしょう。木の文化とはそういう日本人の素直な性格を表していると思います。今回はまっすぐな話なので、それになぞらえて木を割る斧の話で木の文化をいきましょうか。「坂田の金時」といえば「？？」となる人でも「金太郎」といえば「まさかつかついだ金太郎」となります。そして絵柄はそれぞれ違っていますが、共通しているところに、斧に刻まれた三本線があります。その斧の反対側には四本線があります。これはなぜか全国共通です。なぜでしょう？

子供に聞くと「斧の表と裏」とか「魔よけのおまじない」という意見が出ます。子供なりに素直な、本当に頭をなでやりたくなるような答えです。魔よけという答えもいいのですが、私は次のように教えられました。

三本線はミキといって御神酒おみきつまのお酒。四本線はヨキといって五穀よこのことです。地・水・火・風を表し、四方山の山海の珍味です。



使われなくなった「道具」たち。切れ味は今も現役

私は、現在「私設林業博物館」をつくる計画の、元実家の二階に道具をそろえつつあります。百人いたらほぼ百人全員がそんなばかなこととおっしゃる。また、変わった人のようにも言われる。親父にいたっては「場所代までとらんといかん」とあきらめ顔。

そういえば高知には林業博物館はなかったな？ いまさら箱物をつくる時代ではない。少しだけスペースがあればいい。千年続いた日本の木の文化は道具とともに復活する日が必ず来る。そんな日を待ち望んでいる。

(ふくどめまさし)



「日本の民話えほん・きんたろう」さねとつあきら・文／田島征三・画（教育画劇）

万葉文芸学 (二)

浜田清次

四

前回、わたくしは、郷土土佐の大先哲鹿持雅澄先生の『万葉集古義』を、万葉学の集大成書として絶賛しながら、それが歌の文芸性の究明に言及していないのを残念がりました。雅澄先生という方は、万葉集の精神として、「皇神の道義」とともに、「言霊の風雅」ということを唱導、歌の文芸性を重視せられ、さらに『山斎集』という優れた家集も残されていて、結構、芸術的センスの豊かな学者であっただけに、それは一層惜しまれることでした。

国学という学問は、古典を通して日本固有の文化と精神を明らかにしようとした学問ですが、その古典たるや、仮名の発明せられていない時代の産物として、古事記にしても、万葉集にしても、漢字ばかりで書かれているのです。特に万葉集は、漢字の音と訓とをそれぞれ自由奔放に使って書かれているものですから、大変難しい。

で、万葉集が出来てまだ二百年と経たないうちに、もうはや読めなくなり、十世紀の中頃、村上天皇は、当時の優れた学者であり歌人である五人の人物に命じて、その読み仮名をつけさせたりしています。その後もずっと読み方の研究は続いて、大體は読めるようになりましたが、それでも平成のこんにち、まだ定訓を

えない歌はいっぱいあり、中にはろくに噛みつけもしない歌さえあるのです。それに奈良時代の古い言葉で詠まれていますから、意味のはっきりしないものも多い。文法も違いますが、発音も違っていたのです。

そこで、国学はまず、そういう問題の多い古典を正しく読み解こうとしたのです。いわゆる訓詁注釈ですね。それが必緊の課題であったのです。ですから、僧契沖にしても、賀茂真淵にしても、本居宣長にしても、わが鹿持雅澄先生にしても、みんなそれに心肝を砕いたのです。そうした国学者たちに万葉秀歌の文芸性の究明を求めることは、求めるほうが無理かもしれません。

いや、訓詁注釈を万葉学の主眼とする傾向は、国学だけに限りません。

五

さほ言え、文芸性の究明を万葉研究の第一義として尽力した先人が、全然いなかっただけではありません。明治・大正・昭和の優れた歌人、わ

けてもアララギ派の代表的歌人——伊藤左千夫・島木赤彦・斎藤茂吉らであります。その筋の著書として、左千夫には『万葉集新釈』があり、赤彦には『万葉集の鑑賞及び其批評』があり、茂吉には『万葉秀歌』があります。

彼らは、何をどう味わっているのでしょうか。アララギの祖でもあり、赤彦・茂吉の師でもあった左千夫の言を聞きましょう。「吉野宮に幸せし時、柿本朝臣麻呂の作れる歌」(巻一、三六〇三九)に対する鑑賞・批評であります。

——此の二篇は実に人麿一代の傑作である。思ふに人麿の一生中最も得意の時期で、而かも年齒猶壯にして、従て意気旺なりしものありしか。一篇の落想用語頗る放胆である。些末の点には一向注意せざるもの如きも、全篇の上には却て自然の統一を見るのである。思想格調が悉く興国の気泰平の象である。室内に坐し机辺にあつて詠唱すべき歌ではない。高天の下に立ち大地を踏み、静かに朗誦幾遍せば、何人と雖も、云ふに云はれぬ尊い感に打たれて、神の御世と云ふことを思はずには居られない。「山川も依りて仕ふる神の御代かも」の嘆唱はどうしても神の

声である。全く人間を超絶した響である。何とも格調の高い鑑賞・批評ですねえ。「牛飼が歌よむ時に世のなかの新しい歌大いにおこる」と言挙げし、「叫びの説」を唱えた左千夫らしい、その面目躍如たる鑑賞・批評ではありませんか。こうした力強い発言が、人々をして万葉の美的世界へ開眼させるのに、大きな役割を果たしたことは確かです。わたくしなども、その一人です。

しかし、わたくしは、こうしたアララギ諸家の説に、決して満足して

いたわけではありません。万葉を文芸的に捉えようとする基本姿勢に対しては、文句なしに敬服しながら、その具体的な取り扱い方については、あきたりなく思うことが多かったのです。

第一『万葉集新釈』は、巻一だけ

のものであつて、ごく一部分に過ぎないのであります。『万葉集の鑑賞及び其批評』も『万葉秀歌』も、短歌だけの論であつて、長歌には及んでいません。万葉集には長歌が約二六〇首あり、中には柿本人麻呂の「高市皇子挽歌」や、山上憶良の「貧窮問答の歌」などもあつて、磐石の重きをなしています。長歌を度外視して万葉を論ずることは、ナンセンスに近いでしょう。

それに、彼らの鑑賞・批評はなべて直観的・抽象的で、具体的・分析的でない嫌いがあります。大雑把で精細さにも欠けます。自己の歌論に引きつける強引さも気になります。多大の恩顧をかたじけなくしながら、わたくしの不満はなお解



歌人、伊藤左千夫 『無一塵庵』にて
(成東町歴史民俗資料館蔵)

消せられませんでした。

このような次第で、わたくしは結局、わたくしの非力で、万葉に体当たりしなければならなくなりました。

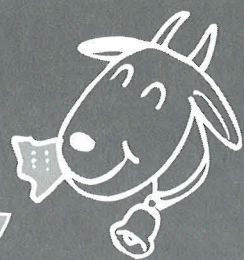
六

終戦直後、いささか思うところがあつて、高知師範学校教授の任を辞し、家人ゆかりの地、高岡郡佐川町の佐川女学校に落ちついたわたくしは、決意も新たに、沢瀉久孝・森本治吉共著『作者別年代順万葉集』をテキストとして、万葉集を何度も何度も熟読玩味し、その文芸性を究明して『万葉思潮』なるものをノートして行きました。

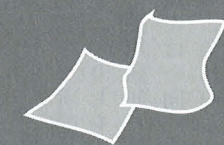
ところが、そのノートが五冊に達した時、突如わたくしの学問研究に大きな転機が訪れ、わたくしの志向は、一転して古事記に移り、再転して日本書紀に移り、わたくしは『記紀万葉集の研究』『壬申紀私注』『孝徳天皇私記』の述作に追われて、万葉集を顧みる暇がありませんでした。そのわたくしが、万葉集に回帰したのは、高新文化教室万葉講座の講師を頼まれたからです。三十年ぶりの回帰でした。

(二〇〇一、三、三一)
(はまだきよつぐ／国文学者)

白やぎさん



山田まさ子



仁淀村は旧別枝村、字中村に住む六十代の方が、山羊の話をしてくださいました。子供のとき、家に山羊がいた。かわいくてたまらず、親父にないしよ、ふるい芋をやったところ、山羊の腹が、はちきれそうに膨れた。大きくなったと喜んでいたら、その晩に、山羊は死んでしまった。生後二カ月、昨日まで、れんげ草の中を、ころがりながら跳びはねていた。話してくれた人は、私が、やれ山羊の匂いはどうだったかだの、眼の色は、毛の手触りは？などと尋ねたせいだろう。腕の中で動かなくなつた山羊の話をしていた途中で、涙をこぼしてしまつた。

五十年前前の記憶なのに、農家の人にとつての山羊がどんなに愛しいものであつたか、私が気づいたのは、その目尻に浮かんだ、皺にはさまつた数滴をみたときであつた。

このことを私は年配の友人K氏に話した。K氏にも山羊の記憶があつた。

「メエーはのう、わしのために、親父が連れてきてくれたがじゃ」

両親は、病弱な子供に何とか滋養をつけさせようと、山羊を飼うことにした。山羊は、牛小屋の隅にいた。ここで毎日、乳をしぼるのがK少年の日課であつた。

「乳しぼりの達人ともなると、ふたつある山羊のおっぱいを、片手ずつ握つて、広口のバケツにきゅっきゅつと、勢いよくしかも短時間で飛ばすようにしている。」

「わしはのう、下手というよりは、なかつたけんど」K少年の言によると、山羊の乳しぼりはむづかしい。

ひとつのおっぱいを両手で持ち、片方に二十分はかかり、退屈した山羊は途中であろうことか、お尻を突き出したかと思うと、黒いころころしたものを乳よりも勢いよく、バケツの中におみまいる。

先がふたつに割れた、糞で少し黄ばんだ前足を、せつかく入れたミルクバケツに、ひよいと突つ込む。

それでも、喉もとを撫ぜると、白い睫毛を伏せる様子は可愛いかった。このときも、私があんまり詳しくさいたせいであろう。K氏は、さみしそうに言い出した。

「おおの、おまんに話しよつたら、メエーに逢いとうてたまらんやつた」

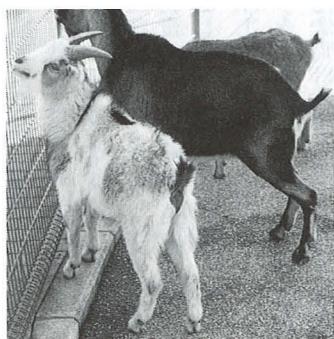
おかしな話だが、私まで山羊に逢いたくなくなった。子供のころ、山羊の乳を近所で売つていた。すっぱいように獣くさくて、おいしかった。繫いであつたのを、こっそり抱きしめてみたら、粗い毛の間から、藁の匂

いがした。

メエーに逢いたい、だかどこにいるのか？ 昔、畑のすみっこにいたありふれた白山羊さんである。

わんぱくこうち動物園に出かけた。白、黒、茶色、三色カラーに、りっぱな角がはえ、黄金色の眼が輝いている。担当の渡部さんが答えた。「うちにいるのはとから山羊です。お探しの白山羊はいません」

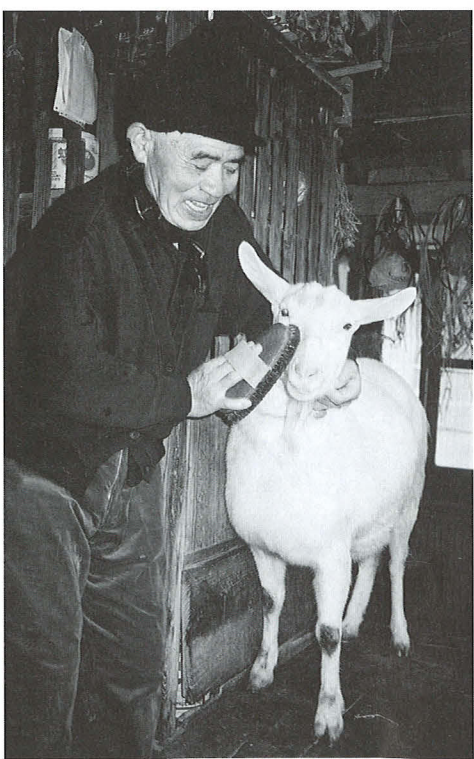
のいち動物公園には、今は山羊は一匹もない。以前いたのも、ピグミーゴートという別の種類であつた。



わんぱくこうちの山羊たち

県中央家畜保健衛生所に尋ねた。「昔いた白い山羊？ 明治に日本に入った山羊で、ザーネン種といえます。佐川の畜産試験場に、一匹いますよ」

どうせなら、試験場などではなく、人家で可愛がられている白山羊さんの姿をみたいではないか。久しぶりのお乳も飲みたい。



カメラを意識しているものの、西森さんに毛ときをもらってうれしそう

白い睫毛に、茶色の透き通つた眼をしていて。ブラシがあてられ、といて貰うと、睫毛を伏せた。私は思わず、長い首を引き寄せた。獣くささと、藁の匂いが混じつて、頬に鼻に唇に、ごわごわした山羊の毛がささる。今ではもう、人が振り向かなくなつた匂いであつた。

納屋の戸を開けると、雪はみぞれから牡丹雪に変わつていた。ふりむくと、囲いから首をのぼす白山羊さんの茶色い眼とぶつかった。サッシの戸を閉めながら、問われもしないのに私は人に言うように、山羊にまた来るからねと言ひ、口にしたあと、もう逢うこともないだろうという想いが突き上げてきた。

柳瀬川の土手を、山羊と草地を踏んで歩く。遠くには地元の方が富士山にみだてているという山が広がり、手をのばせば、命の恩人の粗い毛がぬく、指にさわる。

山羊乳を飲まして貰つた上に、あつかましいお願いだが、私は西森さんに山羊を出して、毛ときをしてほしいと頼んだ。ひっぱり出された山羊は早くも首をのぼし、眉間のあたりをかいてほしいと、せがんでいる。

(やまだまさ子)



(白いお髭の白やぎさん)

葉山村に食用用の山羊を四匹飼つている人がいる。これはいけない。鳥形山付近で六年前まで山羊の乳を売つていた(実際はもういなくなつた)、大阪城付近の喫茶店で山羊ミルクを飲ませるが高知産らしい(行つてみると九州の山羊であつた) などなど。どの情報も役にはたさず。昔は草地に繫いであつた、童謡にも歌われた白山羊さんが、いかに遠い存在になつたか、思い知らされた日々であつた。

「山羊なら、いますよ」

子ども科学図書館の指導員さんが、教えてくれた。今や憧れとなつたかの山羊は、西佐川駅下車、バスで三十分、本郷耕、松ノ木の西森さん宅にいる。小学校の先生を長年勤めて退職し、夫婦暮らしの七十六歳。

電話で返事をとりつけるなり、半時間後に汽車に飛び乗つた。二月十

九日、西佐川駅に降りると、みぞれのような雪が降りかかり、山はまだらに白い。二時間に一本のバスを待つわけにもいかず、タクシーに乗つた。柳瀬川に沿つて、今では複式学級となつた尾川小学校の横を通過し、移動スーパリーの車とすれ違いながら、松ノ木まで到着した。

ここからは、凍つた坂道をよるよると歩く。切り芋が干してあるのがみえ、鶏の白い首を突き出しているのがのぞき、めざす山羊小屋らしきものがある。かん高い声のおばあさんがミシンを踏むのをやめて、飛び出してきた。おじいさんを今、呼んでくるから、山羊をみていてくれと言ふ。

サッシつきのりっぱな戸口がついている。母子ふたり、三歳と二歳半、顎に髭のついた、柔らかい眼差しの、まぎれもなく白山羊さんであつた。芋の茎や玉蜀黍の葉などの他に、大根や白菜の御馳走も箱に入れてあつて、衛生的な藁をたくさん敷いて貰つている。

西森さんの話は、こうであつた。中年のときに腸の病気になる、もう助からないと言われたとき、山羊の乳で生き返つた。山羊は命の恩人です、食べたりはしません。

私は件のK氏の乳しぼりの苦勞を

桜の散るころ

田代夕子

彼は、そう言った。

二十七、八年も前になるうか。桜も散りぎわのころ、筆山で、花見の宴をはった。小説や詩、エッセイ、また絵など書いたりする十人ほどが集まり、酒をくみかわし、芸術談義に花がさいた。

ムード派で、軽妙なものの言い方のKさんは、座の中心だった。そろそろおひらきという時、空模様があやしくなってきた、急に強風が吹いた。

その時、Kさんの持っていたさかずきの中に、桜の花びらが、はらりと浮かんだ。

「おお、これは……」、Kさんは感激し、一瞬その風情を楽しんでいた。皆は早々に、ござを巻いて、坂道をおりはじめた。

桜吹雪の下を、大柄なKさんが、ゆらりゆらりと、くだっていく後姿が今も眼に浮かぶ。

Kさん、すべてに恵まれていた時だった。

この時、私は三十年後にKさんの片足切断の場に行きあうとは思いやらなかつた。

Kさんとの出会いの記憶は定かでないが、同郷で、家も近くというところが、少ししてからわかつた。Kさ

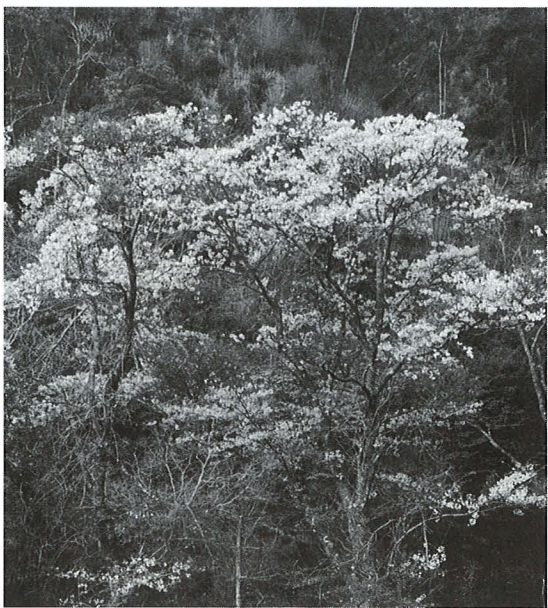
んの家の二階にむかつて、名前を呼ぶと、手すりの上から、のそりと顔を出した。私の結婚の時は仲人役をひきうけてくれた。Kさんのことを、風のたよりで聞くようになった。町を、ひょうひょうと歩いていく姿を、時折みかけた。

ある時、Kさんは、小さなライブハウスへ案内してくれた。ギターやハーモニカで、ひきがたりする若者達が集まり、店内はいっつ行っても熱気にあふれていた。Kさんは時々、梅酒のグラスを口に、腕組みし、眼を閉じ、うつむいてじっと聞きかっていた。Kさんは、そこを、ひとに教えたくない秘密の場所だと私に言った。なるほど、

私も、その若者達の真剣な生命力に心うたれた。病進行中のKさんには、その生の実感、痛さのような感覚でこの時全身にしみこんでいたのであるまいか。

そのあと少しして入院。そして五年目の桜の季節がめぐってきた。

先日、例のライ



プハウスの若者の一人に会った時、「だんだん、お化けみたいになっていく」と、Kさんがつぶやいたという。

私は、しばらく、Kさんに会えなかつた。

Kさんは、すべてのものを失った。Kさんは、どんどん透明になってゆく。

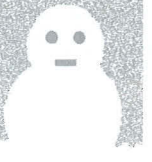
Kさんの肉体と魂は、あるいは、もう現世のものではないのかもしれない。

この春、桜の散るころ、彼は、もうひとつの足をも、失う。思えば、不思議な縁であつた。

(たしろゆうこ)

土佐人と名前の功罪

雪本信彰



春は人の動く季節。名刺を交換する機会も多いが、私の場合、大抵の方が「珍しいお名前ですね」とおっしゃる。「高知では涼しそうだ」とか「きれいな名前ですね」と喜んでくれるのだが、私にはそれが不思議である。

会う人ごとに言われるので、名前だけがきれいなのかと反発したくないが、生まれたときからこんな名前を使っていると何の感動もない。出身地の大阪では、小学校のクラスに同姓は何人もいたので、姓ではなく名で呼び合っていたほどだ。

事実、珍しい程度はさほどのものではなく、多分「雪」という字が気に入ってくれているのであろう。しかし活字の「雪」は横線ばかりだし、手書きにしても「雪」と「本」ではバランスが取りにくい。自分ではごく普通の名前だと思っている。

この名前がほんとに珍しいの？と

思い始めたのは高知に来てからである。取材先で名刺を出すたびに冒頭のように「これは珍しい。ご出身は高知ですか？」と必ず尋ねられる。

「いいえ、大阪です」と答えると、「じゃあご親戚が高知に？」「いいえ、いません」「なら学校が高知でしたか」「それも違います」「では、なぜ高知に？」——こんな会話がしばらく続き、本題の取材にならない。

これだけならまだ良い。時には「じゃあ奥さんも県外の方で？」「いいえ、これは地場産品を調達しました」「ほう、どこで知り合いましたか？」——高知という所は詮索好きな人が多いとつくづく思った。

名前が珍しいということは、それだけ人に早く覚えてもらえる利点はあるが、逆に悪いことをすれば、すぐにはれるというリスクもある。高知新聞に署名記事を出すのは職業柄当然のこと、ラジオ出演で名前が出るのも仕方がない、と少しずつ譲歩

してきたが、ニュース解説でテレビに定期的に出演したときは困った。名前が珍しいところへ顔まで写る。夜の飲み屋街を歩いていたら呼び込みの男性から「よつ、高知新聞」と声が掛かる。「何で知ってるの？」と聞けば「テレビ見てるよ」。

かれこれ三十年の土佐人生活になるが、こんな名前のせいで、いまだに土佐人と認めてもらえず、「県外人」呼ばわりされる。

「下川口」「この道はなんぶ車が多い。歩いて歩きたい」「なんぶ車が多い。歩いて歩きたい」「なんぶ車が多い。歩いて歩きたい」

大阪におれば京都も神戸も同じ平面上にあり県外意識は全くない。ところが高知は四国山地に阻まれ土佐独自の文化が育っている。言語はその代表格の一つだろう。人は、子供時代を過ごした土地の話し方が生涯抜けないという話を何

かの本で読んだことがある。表面上は上手に土佐弁を話しても、イントネーションはどこかに大阪訛りが残っているようだ。こちらも「県外人」と言われる理由の一つかもしれないが、いやいや、やっぱり名前の珍しさが一番の理由であろう。

最近は大阪に帰っても「すっかり土佐の人になったねえ」と言われる。半面、高知では「県外人」と呼ばれる。中途半端で身の置き場に困るばかりだ。

余談だが、高知新聞夕刊に連載した直木賞作家、津本陽さんの小説「奔馬の夢」で約二年間、土佐弁の手直しを担当した。三十年の土佐弁キャリアがあれば問題はないと高をくくっていたが、これが難しい。方言辞典を調べ、なおかつ生粋の土佐人に教えを請いながら土佐弁に訳したが、やはり中途半端な土佐人もどきではうまくいかないと思つた。

土佐弁は奥が深い。新人記者時代、社内雑談をしていたら当時の社会部長が突然「無益」と言い放つたことがある。「無益！」なんて言葉は時代劇でしか聞いたことがなかった。深い感動を味わうとともに、大変な所に来たと思つたことだった。(ゆきもとのおあき／高知新聞編集局長兼学芸部長)



明善学舎は、明治八年に設立された小学校である。もとは私塾であったが、改称や合併を経て、その歴史は旭尋常小学校・市立旭小学校へと続いている。旭小学校は本宮町に移っていて、この明善学舎の跡は、かつての子どもたちのまなびやから、おとなの馳っばい場所になっている。木村会館を北へ入った十字路。

下 途中の散歩

風俗

掛川進駐軍万歳

ない。今まで高知市内で車を預けることがまずなかったのが、状況の変化で昨年の夏からの半年間、それこそ三日にあげず県庁市役所周辺の駐車場を利用していただけが、ここぞ有難うと言われたことがほとんどないからだ。

真偽のほどは知らないが、その昔主だっ

年に数回松山と高松に出向く。目的は中心部の書店だから車を預ける駐車場もその近辺にするのだが、その度に小さな違和感がある。それは、料金を払って車を出すととき丁寧に有難うございましたと言われることに對してだ。

何でそれが違和感なんだと言っはいいけ

土佐弁 土佐日記

土居重俊 監修
高知市文化振興事業団 編



B6判・上製本・130頁
本体価格 971円(第2刷)

紀貫之の名著『土佐日記』を、現代とさことばでつづる。古典を身近なものにするとともに、土佐弁にも親しめる楽しい本。

珍聞土佐物語(上・下巻)

—五十人の語り部たち

依光 裕 編著

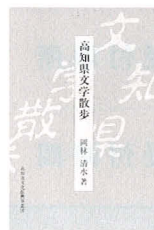


四六判
①392頁 ②408頁
本体価格 各巻1,553円

土佐の山や海辺の村の囲炉裏端で古老が語った地元の伝説や小咄の数々。親から子へ、孫へ語り継ぎたい「ふるさと」がここにある。

高知県文学散歩

岡林清水 著



四六判 278頁
本体価格 1,748円

高知県の文学を地域に即して紹介、その舞台、歴史、作家の足跡等を訪ねて歩く“旅のなかの文学史”ともいえる文学案内。

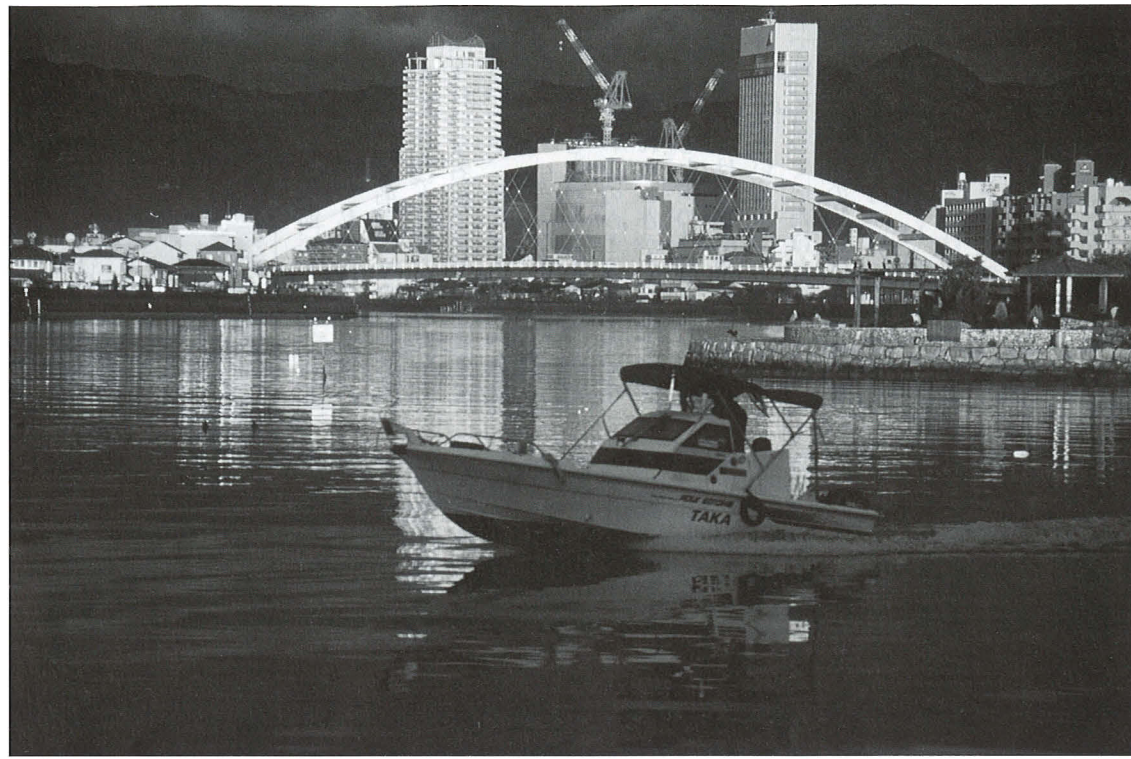
今号の表紙

「盾に昇る」 大野 匠

これはかつて、「日が昇り、日が沈む。影は時を映し、盾はその繰り返しのカウントを刻む。循環と集積を同時に持つ事で、永遠・存在・生・死 それぞれに相反するものが一つのものとして立つ」というコンセプトでつくりました。

現在はもう少し自己に目をむけ、「人力のリアリティー」を追求した制作をしています。

(おおのたくみ)



高知を撮る

水と高層ビル 進化する街・高知

第17回写真コンテスト入賞作品

(平成13年 高知市)

東富晋幸

日1日と変化する高知の街並み。水と山に囲まれた都市・高知の進化する姿を撮影した。

笑いの効用

風俗歳時記



わが国には、昔から、「笑う門には福きたる」、「一怒一老、一笑一若」というような諺があつて、庶民は笑いの効用を体験的に知っていた。

に情報を交換して、複雑な制御機構をもつことが、この学問のおかげで明らかになってきた。

その先鞭をつけたのは、ノーマン・カズンズというアメリカのジャーナリストである。病室で喜劇映画をみたり、漫画やジョーク集を読んだりして、ひたすら笑いに笑って、原因不明の奇病を克服した。(カズンズ著/松田銃訳「笑い」と治療力)

笑いがある治療力を高めることを、身をもって証明したのである。

この分野の研究は、「精神神経免疫学」と呼ばれ、現代医学の先端をゆく学問である。

また、これら以外にも、免疫が関与している病気に、笑いが有効であることが報告されている。

は、「病院寄席」を開き、笑いが脳血管障害患者の血流量を増加させることを、実証している。

ここ数年の間に、この分野の啓蒙書があつて出版された。そのなかの一冊、伊丹仁朗「著」・サトウサンペイ「漫画」『笑いの健康学 笑いが免疫力を高める』は、ガン患者に対する「笑いの効用」の解説書である。

笑いがある効用はガンだけではない。

(朴)

高知市文化プラザ

文化ホールの受付が6月1日から始まります

「高知市文化プラザ」のホールは、平成14年6月からご使用いただけます。使用申し込みの受付は、平成13年6月1日から始まります。

「高知市文化プラザ」には大小2つのホールがあり、大ホールは最大1085席、演劇や音楽など様々な催しに対応できる多目的ホール、小ホールは200人収容可能のオープンスペースで舞台や客席が自由に設定できる実験的多目的ホールとなっています。

●受付開始日

平成13年6月1日から使用申し込みの受付が始まります。

以後、使用を開始しようとする日の1年前の月の初日(1月は5日)から申し込みができます。

例 平成14年9月1日～30日の間に使用予定の場合、平成13年9月1日から申し込みができます。

●受付方法

受付開始日の午前9時までに来られた方で調整会を行います。

調整会以後は、随時、申し込みの受付をします。

●受付場所・受付時間

	受付開始日に行う調整会
受付場所	高知市立中央公民館 高知市本町4-3-30
受付時間	曜日に関係なく毎月1日(1月は5日) 午前9時から

	調整会以後の受付
受付場所	(財)高知市文化振興事業団 高知市本町5-2-3 TEL 088-873-4365
受付時間	月曜日から金曜日まで(祝日を除く) 午前9時から午後5時まで

◎上記の受付場所、受付時間などは、高知市文化プラザが開館するまでの予定です。

◎調整会は高知県立県民文化ホールと合同で行います。

◎市民ギャラリーの使用申し込みの受付は平成13年8月1日から始まります。

◎詳しくは文化振興事業団へお問い合わせ下さい。